

序章 医療的世界 - その人間像の探求 -

Construction of Objects in Medical World

武井 秀夫
Hideo TAKEI

はじめに

千葉大学大学院人文社会科学部研究科（人社研）は2006年4月に、1995年発足の千葉大学大学院社会文化科学研究科（社文研）と同文学研究科、および社会科学研究科（後二者は修士課程）の改組によって誕生した。人社研博士後期課程においては、その前身の社文研の研究教育体制を引き継ぎ、専攻、講座、教育研究分野を横断して研究プロジェクトを組織し、それを通じて院生の研究に対する学際的な支援と研究交流を展開することが奨励されているばかりでなく、研究プロジェクトは正規の教育研究の一環として位置づけられている。本報告書は、研究プロジェクト「医療的世界 - その人間像の探求 -」の成果を参加者の論文集という形でまとめたものである。

「人間像」という切り口

およそどのような学問もそれぞれに固有の対象を持ち、その対象を扱う固有の方法、ないし作法を確立している。対象を記述し、対象を扱う手続きを規定し、形成された新しい知識を表象するために、それぞれに固有の言語をも発展させていく。そうした言語体系＝概念体系の中で、「人間像」はどのような切り口を私たちに提示してくれるのだろうか。詳しくは次章で岩佐が検討することになっているので、ここでは、この研究プロジェクトを立ち上げるに至った経緯を簡略に述べるにとどめておく。

固有の対象とそれを扱う方法・作法を確立した学問には、その対象を固有の対象たらしめている背景として、一定の世界観、ひいては人間観が存在しているといえる。学問的な言語体系＝概念体系は、まさにこの背景を地として理解されることによって初めてその十全な意味を開示する。しかし、それだけ重要なこの背景も、学問的営為の中で常に明確に意識されているわけではない。むしろ、一つの学問コミュニティによって共有されることにより、それは常識となり、潜在化していくものと考えられる。そのためか、マーシャル・サーリンズやアラン・ヤングによる優れた論文はあるものの、人間像をテーマとした議論はこれまでも決して多くはなかったのである。

本研究プロジェクトの実質的なきっかけは、バイロン・J・グッドによる人間像に関するもう一つの優れた論文である。グッドは、医学教育において医学生が学び、身につけていくものが、人間の生物学的身体に「自然の階層的秩序」を見て取るまなざしであること、そして、そのまなざしは医学・医療の世界を超えた強力な影響力を持つものでもあることを指摘している。このまなざしは、何よりもまず身体についてのテクノロジーである医学を形成するものであると同時に、医療における身体以外の側面を二義的なものとするまなざしである。

では、同じ医療の領域にありながら、より患者に近いと思われることの多い看護師や、その実践を支える看護学においてはどのような人間観、あるいは、人間を見るまなざしが存在しているのか。工藤由美は2006年度修士論文『看護という文化』で、看護教育とその後の職業的実践を通じて人が看護師になっていくプロセスを分析的に記述し、看護師になるということの重要な一面として、「パッチワーク的」に把握される「全人的人間像」を構築する方法を身につけることがあることを明らかにした。これが、本研究プロジェクトのより直接的なきっかけを与えることになった。

社文研発足以来、大学院の講座名や教育研究分野名に文化人類学、あるいは医療人類学という名称が明記されたことはなかったものの、私たちの研究室にはつねに医療に関連したテーマの文化人類学的研究を志向する院生たちが多数を占めてきた。その中でも、博士前期課程や研究生をも含めてテーマの多様性を考えたとき、今年度ほど多様な人々が揃ったのはまれである。医療に関わるさまざまな領域における人間像を描き出す試みにはもってこいである。こうして、本研究プロジェクトは動き出すことになったのである。

共同研究会

本研究プロジェクトは、学期中に月1回のペースで行う共同研究会への報告と討論を中心に進められていった。11月を除いて、なんとかこのペースが守れたのは、本研究プロジェクト参加者の熱意の賜である。この共同研究会での報告に、さらに考察を加えてまとめられたものが、本報告書の各章を構成する論文となっている。共同研究会の期日および報告者、報告テーマは以下の通りである。（敬称略）

第1回 5月12日（土）15:00～16:30

報告者1：武井秀夫（プロジェクト責任者）

「研究プロジェクト『医療的世界 - その人間像の探求 - 』について」

報告者2：岩佐光広（千葉大人社研博士後期課程2年）

「研究概念としての『人間像』」

第2回 6月23日（土）15:00～19:00

報告者1：江原智彦（総合医療センター成田病院、作業療法士）

「精神科作業療法の開設について」

報告者2：五島秀一（千葉大人社研博士後期課程1年）

「新設障害者施設の建築計画における人権思想」

第3回 7月14日（土）15:00～19:00

報告者1：武井秀夫、岩佐光広、工藤由美（千葉大人社研博士後期課程1年）

「人社研紀要・研究ノート『医療的世界 - その人間像の探求 - 』について」

報告者2：伊藤佳世子（千葉大人社研博士前期課程1年）

「筋ジストロフィーの脱ターミナル化に向けて」

資料提供：間宮郁子（国リハ障害福祉研究部流動研究員）
「リハビリテーションというイデオロギーと組織」

第4回 10月20日（土）15:00～19:00

報告者： 兼松良（千葉大人社研博士後期課程2年）
「スウェーデンと対照的な現実を生成し続ける日本の福祉と日本における
成功例と謳われる施設Aの実践」

第5回 12月1日（土）15:00～19:00

報告者： 鈴木隆雄（立教大修士）
「中途障害者として出会った医療的世界」

第6回 1月31日（木）12:00～14:00

報告者： 鈴木明子（千葉大人社研博士後期課程、千葉大看護学部助教）
「手術室の文化と患者像」

共同研究会は、当初、報告者2人で3時間の予定であったが、非常に活発な討論が展開された結果、それだけの時間ではとうてい収まらず、毎回4時間を設定することになった。しかし、実際に運営してみれば、ほとんどいつも4時間を超過し、夕食をつつきながらの延長戦に突入していた。そうして積み上げられてきた議論が、うまく反映された論集になることを願っている。